

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

一 置 ラ ン プ

感謝祭の日に、午後一時の中食に、お春のうちではお客があつた。馬場家の姉妹で、北河崎と佐伯村との中間に住んでゐるのだが、毎年、感謝祭の日には、田中の家へ招かれて來るといふのが二十五ヶ年以上例になつてゐた。お春は、食事の後片付けを済ましてから、黙つて本を讀んでゐたが、夕方五時頃になつて、下山の家へ行つてもよいかと尋ねた。

「感謝祭の日なんかには、何だつて下山の子供達に遇ひたがるのさ。一度位おとなしく坐つて、長者の有益なる談話を聞いてゐられさうなものだに。御前は、ちつとも、獨りでぢつとして居られないで、始終、あちこち動きたがる。」とおみね伯母さんが言つた。

「下山の家に、新しいランプが出来たので、おしまさんと私と、行つて、燈火の點く所を見て、一寸、會をしゃうつて約束したんです。」

「一體全體下山の家でランプなんかを如何しやうつていふのさ。何處から、買ふお金を貰つたらう。もし、あすこの親父が在宅なら、持ち出して何かと交換してしまふだらうにさ。」

「子供達が石鹼を賣つた賞品に取つたんです。一ヶ年位かゝつてやつてゐたんですが、伯母さんが御葬式にいらしたあの日に、おしまさんと私とで、賣るのを手傳つたのだと伯母さんにお話したでせう。」

「そうかね。氣に留めて聞いてみなかったと見えて、ランプの事は初耳だよ。ぢや、一時間行つてお出で。それ以上はいけない。六時頃は夜半位暗いからよ。少し林檎を持つて行くがよい。おや、その新しい着物の、衣袋に何を入れてるの。かくしがダラリと下つてゐるぢやないか。」

「お糞食の時に出了た『くるみ』と干葡萄です。伯母さんが私のお皿に入れて下すつたの丈です。」とお春は答へた。この子はどんな罪のない行爲でも、おみね伯母さんに隠し了せた例がなかつた。

「何故食べなかつたの。」

「御馳走を他に澤山食べたから。それに、これを貯つて置いたら、下山の家の爲にもよからうと思つて。」とお春は吃り吃り答へた。他人の前で、叱られたり、問ひ糺されたりするのが厭でたまらないのだつた。

おみね伯母さんが中に入つて、

「お前のだから、他にやらうと思つて貯つて置いてても差支ないだよ。今日は、自分達のうけてゐる恵みばかりを考へないで、他所の人にも感謝の念を起こさせるやうな事をして上げないでは、すまない日です。」

馬場の姉妹は、お春が出て行く時に、お春の行爲を是認する意味でうなづいてやり、暫く見ないうちに、見違へる程大きくなりまた良くなつたといつて賞めた。

おみね伯母さんは、

「同じ家に暮らして居ると分るんだが、良くなる餘地はまだく澤山あるんですよ。あの子は、何へでも首を突込んで……いえ突込むばかりぢやない、餓鬼大將になるんでね、それが何か悪い事つていふとなほのこと。……しかし、およそ何が馬鹿氣てゐるつていへば今のランプには呆れるね。下山の家の者のやりさうな事だが、あそこの子供達に商賣をする頭腦があらうとは思はなかつた。」

「一人はたしかに商賣上手なのでせうよ。北河崎の荒田の家へ石鹼を賣りに來た少女の事を、一郎さんが實に愛嬌のある目立つ子だと言つてゐましたもの。」と、馬場のおれんといふのが言つた。

「下山のお倉の事にちがひないが、あの子を目立つ子だなどは言へないね。一郎さんは、このごろ歸つて來てゐるの。」とおみねが尋ねた。

「えい。この二三日荒田の叔母さんとこに泊つてゐますよ。何でも、今ぢや、いくらお金が儲かるんだか分らない程なんだつて。それで、來るたんびに近所の人に、御土産を持つて來るんです。こんどは毛皮を一揃へ荒田の小母さんに持つて來たのですよ。もとは、あの人、着換へのシャツもなくて素足で居たんですのに。でもあれだけ御金があつて、御嫁さんを貰はないのは妙ですね。子供が大好きでいつでもぞろ／＼連れてゐるくせに。」

およねは、微笑んで、

「まだ／＼分りませんよ。三十を越してはしないでせうから。」

「あゝ、年が百になつたつて、この河崎で嫁になりては澤山ある。」と、おみねが言ふ。

「一郎さんの叔母さんが言つてましたよ。一郎があのお石鹼を賣りに來た少女（お倉つていふんですつて？）を可愛いがつてクリスマスには贈物をやるんだつて言つてゐるつて。」

「葦食ふ蟲も好き／＼さね」と、おみねが言つた。「お倉は斜視で紅髪だわね。もつとあの子がクリスマスに贈物をもらふ邪魔をする積りは私はちつともないんだが。一郎さんが與ればそれだけ此村が樂をするんだから。」

馬場おいは、

「下山に他に娘があるんでせう？ 賣りに來た子は斜視ではないんですよ。淺野の小母さんが、一郎は、その兒の眼が美しかつたと言つてたといひましたもの。三百個も石鹼を買ふ氣になつたのも、その眼のせいだと言つたそうですよ。荒

田の小母さんは、物置にその石鹼を積み上げましたわ。」

「三百個！」とおみねは絶叫して「此の河崎に盡きないものが一つある！」

「それは何ですの」と、おいとが謹んで訊くと、

「馬鹿の種子たかさ！」と手短にいつてのけて、おみねは話題を轉へた。およねは、先刻から氣が揉めてビクビクしてゐるところだったので、やつと安心をした。およねは

「お春でなくて、此河崎に、愛嬌があつて目立つ少女といふものが居よう筈がない。お春でなくて、そんな綺麗な眼の子があらう筈がない！ お春でなくて、どうして／＼何百個といふ石鹼を人に買はせる事が出来るもの乎」と考へてゐたのである。

.....

お春は黄昏時の路を飛ぶやうにして行くと、やがて、せわしない足音が聞こえて、見馴れた人影が、向ふからやつて來た。それは、金子おしまだつたので二人は、息もつきあへず談話を初めた。

「大變な事が出來たのよ」と、おしまが、せい／＼言ひながら切り出すと、

「まさか、破れたんぢやないでせう。」と、お春が受ける。

「いゝえ、いゝえ、そうぢやないのよ。薬に包まつて一つ一つちやんと出たのよ。私行つて見てゐただけけれど、あなたが、三百個賣つたお蔭で、ランプが來たんだなど、それや一言だつて言はなかつたの。二人一所の時に話さうと思つて。」

「二人で三百賣つたのよ。あなただつて骨を折つたんぢやないの。」と、お春が言直をした。

「いゝえ。そうぢやないわ。私は門のところで馬の手綱を持つてゐただけよ。」

「それだけれど、北河崎まで私達が行かれたのは、誰の馬のお蔭？ そうして丁度あれが私の番だつたからよ。あなたが

もしアラガンさんに面會したとしても、やつぱりランプは貰へたんだわ。……大變な事つて何？」

「下山の家に石油もしんもないの。あすこの人達はあの置きランプは、ひとりでに、火がた点つて油がなくても燃えるものかと思つてるのでせうよ。シーソーさんが、芯を借りにお醫者様のとこへ行つたの。うちの母さんが私に石油を三合位下すつたけれど、もうあとは、やらないつて仰るの。ランプをつ点ける費用の事は私達も考へなかつたのね。」

「さうなの。いゝわ、そんな事、今夜の會がすむまで心配しますまいよ。私、くるみだの、干葡萄だの、林檎だのもつて來たの。」

「私は薄荷と楓糖を持つて來たわ。下山の家ぢや今日、感謝祭らしい御馳走を食べたのよ。御醫者様のとこから、御さつと蕪膏とつるこけ桃を貰つてね、うちから牛肉をすこし、それから幸兵衛さんところから、鳥の肉と、刻み肉を一鉢貰つたの。」

X X X X X X X

五時半ごろに、下山の家をのぞいてみる人があつたら、その會がたげな閑なのかわかつたらう。下山のおかみさんは、臺所の七輪の火が消えてしまふのもかまはず、赤ん坊を抱いてその席へ出て來た。まるで、ランプがお客を招いて接待をしてゐるように見えた。子供達は、家中にたつた一つある臺を持出して、ランプの臺座にするつもりで、座敷の遠い隅に置いた。その臺の上に、その尊い有難い望みの品が鎮座ましましてゐた。美しい事は廣告にかいてあつた位に美しく、大きさは廣告の半分程であつた。眞鍮の部分は、黄金のやうにきらめき、眞紅の紙傘は、巨大なルビーのやうに光つてゐた。ランプから放射される光の中に、下山の家族が、謹み畏かしこんで座つてゐた。そしてその後ろに、お春はおしまと手をつないで立つてゐた。誰れも談話をする氣がなかつた。その光景があまりに莊嚴で口をきく事も出来なかつたのである。一同は、心の中で、このランプのおかげで、このまゝとるに威嚴がつき、このランプがあるだけで自棄ピアノだの樂隊をきいてゐる様

に興が湧くのだと思つた。

「父さんに見せたいね。」と下山お倉は、さすがに、親の事を考へて、そいつた。

「父さんがみさら、また、何かと、そりかへるよ」と、舌たらずの鈴ちやんが、こまちやくれた口をきくのだった。

約束の時間が来たので、お春は、この魅せられるやうな場面から、いや／＼歸り途についた。

「あなたとおしまさんとが家へかへり着いた時分に、このランプを消すわ。丁度いいのね、あなた達二人とも家が近いから、私のうちの窓からランプのあかりが映してるのが見えるわ。毎晩きちんと一時間しかあかりを點けないとしたら、油を注さないで幾晩もつでせう」と、おくらが云つた。

丁度その時シーソーが物置から出て来て、

「石油がないつて心配することはない。うちの物置に一樽来てゐる。運送屋が、誰だか手紙で註文してよこしたつていつて、北河崎から届けて来たんだ。」

お春は、おしまの腕を掴むと、おしまも嬉しさうにお春のを掴みかへした。そして二人で門の方へ走け出しながら「きつとアラデンさんね」と囁きあつた。シーソーは二人について来て、そこらまで送つて上げやうと言ひ出したが、お春がきつぱり断つたので、無理にともしへなくなつて、仕方なく、お春の夢でも見ようと床に入つてしまった。その夢に、お春の兩眼から電光が出てそしてお春は兩手に火の劍をもつてゐた。

お春は、いそ／＼と、自宅の食堂に入つた。馬場の姉妹はもう歸つてしまつてゐて、伯母達二人が編物をしてゐた。

お春は帽子とマントを脱いで、

「何ていへないよい會だつたのよ。」

「も一度行つて、戸をよく閉めて来たかどうか見ておいで。そして戸締りをして。」と、おみねは、例の嚴しい態度でやり

出した。

お春は氣が立つてゐて黙つてしまへないので、戻つて來てからも、

「何ていへない、會だつたのよ。伯母さんもおよね伯母さも、一寸お勝手へ來て『流し』のところの窓から見てもらなさい。ランプが赤く光つて、まるで下山の家が火事になつてるやうなの。」

「きつと、いまにほんもの、火事でも出すんだらう。あんな、くだらない眞似をして、ほんとに呆れるね。」とおみねは言つた。

およねは、お春について臺所へ行つて見た。遠くの方にほんやり紅く見えてるだけで、華やかだとは言へなかつたが、およねは、つとめて感心したように見せかけてゐた。

「お春や、北河崎の荒田のうちへ石鹼を三百賣つたのは誰だい。」

「北河崎の誰ですつて。」

「荒田つていふ人。」

「そつといふ名の人なの。」と、お春はびつくりして、

「アラダだつて、私割りによく當てたわね。」と獨りで小聲に笑つてゐた。

「荒田の家へ石鹼を賣つたのは誰だと、伯母さんが訊いてゐるんぢやないか。」

「荒田、アラデン、何て面白いんだらう。」

「返事をおしなさい。」

「あ、御免なさい。私考へてゐるたもんだから、おしまさんと私とで賣つたの。」

「お前、しつこく頼んで、無理に買つてもらつたのかへ。」

「まさか、伯母さん、大人の人に、厭だつていふのを買はせる事なんか私にや出来ないわ。あの方ね、自分の伯母さんに上げるんで、是非石鹼が入用なのだったのよ。」

およねは、まだ少し合點が行かぬけであつたが、口では、

「おみね伯母さんが何ともいひなさらねばいゝが、あの伯母さんはなか／＼やかましいからね。何か、かはつた事をする時には、先に一寸伯母さんに話した方がいゝよ。お前のする事はすいぶん變だから。」と言つた。

「あの事は何にも變ぢやありませんよ。」と、お春は打明ける風に「おしまさんは自分の親類と幸兵衛さんに賣つたの。そして私は、木挽場のそばの貸長屋に始め行つて、それから荒田さんそこへ行つたの、そうしたら、荒田さんが、ありつたけ買つてしまつて、そして賞品が来るまで、黙つてゐろといつて約束をさせなすつたの。だから私話したくてしやうがないのを我慢してゐたから、まるで私のお腹の中であのランプにあかりをつけて燃えてるやうだつたの。」

お春の髪はとけて波をうつて額のところ垂れて來てゐた。その眼は光り輝き、その頬は眞紅になつてゐた。その顔には、敏感、遠慮深さ、熱烈さ、などがほの見えてゐた。そこには椿の花の麗はしさと、若い檨樹かしはの強さがあつた。

「ほんとにさ、今日のお前のその顔つたら、お腹の中にランプが點いてるさうだよ。あゝ、お春や、お前はさう、ものに眞剣にならないで居られるといゝんだが。伯母さんは、時々お前の上が案じられてならない。」